

大横尾辞苑 これであなたもヨコオ博士!?

The Grand Yokoopedia: Why Not Be a Yokoo Expert!?

2026年1月31日(土)—5月6日(水・振休)

開館時間 10:00—18:00

※ 入場は17:30まで

休館日 月曜日 ただし2月23日(月・祝)、5月4日(月・祝)は開館、2月24日(火)は休館

会 場 横尾忠則現代美術館



ポスター(デザイン:横尾忠則)

展覧会について

大横尾辞苑は、ひらがな 45 文字(あ～を)、およびアルファベット 26 文字(A～Z)にそれぞれ対応する、横尾忠則の作品世界に関連する用語を選び、それらにちなんだ作品や資料から構成した、「辞書」仕立ての展覧会です。

横尾忠則は様々な事象に興味を抱く、まさに博覧強記の人です。森羅万象あらゆるものを貪欲に作品のモチーフにする姿勢は、ある意味「百科全書」的といえるかもしれません。今回選定した用語は、必然的にその興味を反映したものとなりました。横尾の人生を彩るエピソードや、交友関係を反映したものもあれば、科学のみでは捉えきれない精神世界や、死の問題に関するものも数多く収録されています。

この「辞書」が、横尾忠則の作品世界をより深く知るだけでなく、我々がより深く、豊かな人生を送るささやかな一助となれば幸いです。



《アストラルタウン》
2008年
横尾忠則現代美術館蔵

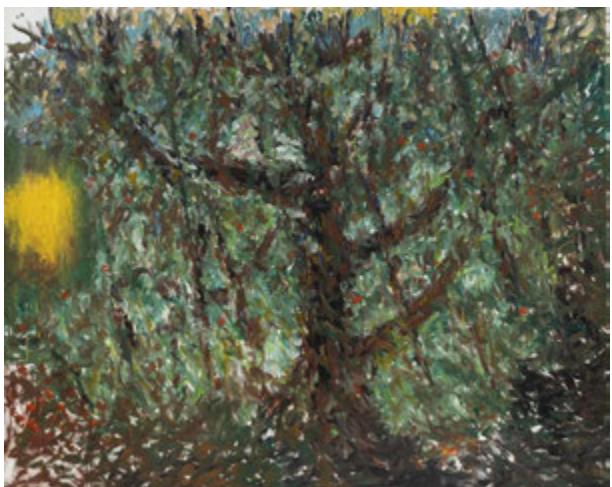
あすとらるたい【アストラル体】[名]

エマヌエル・スウェーデンボルグ (1688～1772) を経て、ルドルフ・シュタイナー (1861～1925) により体系化された「神智学」は、主に「物質」に根拠を求める自然科学とは異なり、「靈」の考察を通じて世界の本質に迫ろうとするものだった。「神智学」では、人間はおおきく1) 肉体、2) エーテル体(靈的身体)、3) アストラル体(精神的身体)から構成されると考える。夜ひとが眠ると、エーテル体を肉体に残したまま、アストラル体が体内からさまよい出し、靈界に至ることがある。「アストラル投射」と呼ばれるこの現象について記したスウェーデンボルグの『靈界日記』は、後世に大きなインパクトを与えた。



横尾は早くからこうした思想に興味を持ち、自身の夢を記録し、死後の世界についても独自に考察を重ねてきた。2019年から執筆が開始された小説『原郷の森』に見られる、すでにこの世を去ったアーティストたちと自在に語らうという設定には、「アストラル投射」と共通するものが感じられる。

『アストラルタウン』は 2008 年に兵庫県立美術館で公開制作されたものである。そもそも Y 字路シリーズは、ただでさえ異界につながるような感覚を有しているが、この作品にはさらにこの世ならざるオーラが感じられることから、靈的世界と交感できる「アストラル体」からタイトルがとられたものと考えられる。



《(原郷の森)》
2019年
横尾忠則現代美術館蔵

げんきようのもり【原郷の森】[名]

2019～2021年に『文學界』に連載された、横尾忠則による長編小説。いつの間にか「原郷の森」へとさまよい込んだ主人公 Y は、パブロ・ピカソ、ジョルジオ・デ・キリコ、アンディ・ウォーホル、マルセル・デュシャン、三島由紀夫、黒澤明ら彼と親交があったか、あるいは私淑していた芸術家たちが語り合うのを聞く。物故芸術家のみならず、ついには宇宙人までが登場し、ひたすら芸術論(横尾論)を展開するのである。「森」のイメージは、横尾のアトリエに隣接する緑地、あるいは郷里の西脇に接続しているようである。単行書刊行時の帯には「芸術家たちが時空を超えて語り合う異色の『芸術小説』」とあるが、小説であると同時に言葉による横尾の作品であり、かつその芸術観に関する信条告白とも考えられる。



絵画《(原郷の森)》は、2019 年に横尾忠則現代美術館で公開制作された作品である。制作にあたり参照されたのは、1970 年に横尾が撮影した写真作品である。雑誌『平凡パンチ』の企画「新人写真家・横尾忠則」のために、富士山麓の深い森のなかに、19 名もの女性ヌードを配して撮影されたものである。横尾はダンテの『神曲』、およびすでに連載を開始していた小説『原郷の森』のイメージをこの写真と重ね合わせたが、制作は未完のまま終わった。タイトルが括弧付きなのは、そのことを反映していると思われる。



《三島由紀夫と R. ワーグナーの肖像》

1983 年

横尾忠則現代美術館蔵

みしまゆきお【三島由紀夫】[名]

1965 年、横尾は日本橋の画廊で個展を開催した。その会場を訪れた小説家の三島由紀夫(1925~1970)に、横尾が作品をプレゼントしたことがきっかけで、ふたりの交友が始まった。



横尾は三島の雑誌連載の挿絵や舞台作品のポスターなど多くのデザインを手掛け、三島は「無礼な芸術」「ポップコーンの心靈術—横尾忠則論」などの優れた横尾論を残しその才能を評価しつつも、時に「礼節の欠如」を指摘した。芸術作品はいくら無礼でも構わないが、日常生活では礼儀礼節が重要である。縦糸が創造、横糸が礼節であり、2 本の糸が交わるところに靈性が宿る。この靈性こそが最も重要であると、三島は横尾に説いた。

1970 年 11 月 25 日、三島は衝撃的な死を遂げる。民間防衛組織「楯の会」のメンバーとともに陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地に突入、日本の将来を憂う檄文を撒き、バルコニーから演説した後に割腹自殺したのである。

三島の死の直前、横尾は写真集『新輯薔薇刑』(1971)の装幀に取り組み、病床にありながらもなんとか校正刷りまでこぎつけた。写真集本体を覆う函を十字形に開くと、薔薇の花々を伴って横たわる三島の裸身が現れる。彼の死の 3 日ほど前、横尾が電話した際、三島はこのデザインを非常に気に入っていると伝え、「これは俺の淫槃図だろう」と主張して譲らなかったという。



《暗夜光路 N 市 -III》

2000 年

横尾忠則現代美術館蔵

わいじろ【Y 字路】[名]

2000 年 10 月から西脇市岡之山美術館で開催された「横尾忠則西脇・記憶の光景展」のために、横尾はのべ 12 日間にわたり故郷の西脇に滞在し、19 点の出品作すべてを現地で制作した。このとき横尾が見出したモチーフが Y 字路である。その誕生のきっかけが、市内の椿坂で撮影した写真であるのはよく知られている。かつての通学路にある三叉路を夜間に簡易カメラ(レンズ付きフィルム)でストロボ撮影したところ、光が届く中央の白壁は明るく照らし出される一方、左右奥へと伸びる道は漆黒の闇に吸い込まれるという、印象的な写真が現れた。



「記憶の光景展」の出品作 19 点のうち 9 点はいずれも「闇」をテーマにしたもので、さらにうち 7 点はすべて三叉路の夜景だった。初期の Y 字路シリーズに共通するのは、極めて素直な写実表現である。時間的制約もあったのかもしれないが、作品はいずれも写真をほぼ忠実に模写している。どちらかというと過剰さを特徴とする横尾の絵画作品のなかでは異質であり、また写真を忠実になぞる方法論は、横尾の創作の原点が子ども時代の絵本の模写であったことも想起させる。

《暗夜光路 N 市 -III》は最初の Y 字路シリーズのなかでも比較的大きい作品で、国登録有形文化財である旧来住家住宅より西へ 150 メートル程の、古い町並みがよく残るエリアを描いている。



《マイルス・デイヴィス「アガルタ」(CBS ソニー)》

1975年

作家蔵

Agharta *n.*

アガルタは地底に存在するとされる王国であり、その首都はシャンバラと呼ばれる。かつて天動説、地動説と並ぶ学説であった地球空洞説で強く支持された。地上をはるかに凌駕する高度な科学文明と精神社会を有し、UFO(未確認飛行物体)は地上を偵察するためにシャンバラから飛来したものとする説もある。

マイルス・デイヴィスの「アガルタ」は、1975年2月1日に大阪フェスティバルホールで行われたライブを収録したもので、ジャケットは横尾忠則のデザインによる。デザインにあたり、横尾は仮編集テープを聴いて構想を練り、「アガルタ」というタイトルを発案した。

1970年代のマイルスの音楽は「エレクトリック期」と呼ばれ、エレキギターやエレキベース、シンセサイザーといった電気楽器を含む、大編成のアンサンブルが特徴である。全く新しいジャズのあり方を提示した「アガルタ」は発表当時あまり理解されず、批評家たちから酷評されたが、現在ではマイルスの「エレクトリック期」を代表する傑作として再評価されている。

横尾のジャケットデザインは、表面は密林、裏面は海底越しに摩天楼をコラージュし、地底の文明都市を表現している。また表面では前景に南洋の美女が配され、裏面では地底都市から上空へ向けて一筋の光が立ち上り、UFOがまさに飛び立とうとしている。



《Ectoplasm》

1985年

横尾忠則現代美術館蔵

Ectoplasm *n.*

「エクトプラズム」は、靈媒がトランス状態におちいった際、主に口腔、鼻腔、耳などの開口部から出現し、物質化するものなどを指す。半透明のゼラチンまたはガス状で様々な形態をなし、時には顔や手など身体の一部、あるいは一時的に全身像を形成することもある。フランスの生理学者シャルル・ロベール・リシェ(1913年にノーベル生理学・医学賞を受賞)の命名によるもので、ギリシア語のエクトス(外の)とプラズマ(物質)とを組み合わせた造語である。19世紀末にイギリスで組織された心霊現象研究会には、上述のリシェを始めとする大勢の科学者たちが参加し、心霊現象を科学的見地から調査しようとした。「エクトプラズム」をはじめとする心霊現象について、多くの観測記録や写真が残されており、トリック写真も少くない一方、一部には未解明の現象も含まれるとされる。



《Ectoplasm》(1985)は、横尾の絵画作品のなかでは、降霊術に直接言及した珍しい作品である。翌1986年には、滋賀県甲賀市信楽町において陶板による作品を集中的に制作しており、その中には降霊術の記録写真を引用した作品が多数含まれている。絵画と異なり、火を通すことで初めて完成するセラミックの、どこか鍊金術を連想させる制作プロセスが、横尾に神秘主義的なモチーフを選択させたのだろうか。



《ピカビア - その愛と誠実 I》

1989年

横尾忠則現代美術館蔵



《SENECA》

2018年

横尾忠則現代美術館蔵

Picabia, Francis n.

横尾が私淑する美術家のなかでも、とりわけ重視するのがフランシス・ピカビア(1879~1953)である。目まぐるしく作風が変わったことで知られ、作風が順を追つてリニアに展開せず、抽象と具象の間をある意味でたらめに行き来しているのが特徴である。

1989年、横尾は雑誌『ユリイカ』の『総特集 ピカビア』(1989、9月臨時増刊号、青土社)の編集に深く関わり、表紙にも手掛けた。表紙には同年に横尾が発表した3連作の大型版画の1点《ピカビア - その愛と誠実 I》(1989)に近似した図像が用いられている。

ピカビアに関する研究書などが、日本にはまだほとんどなかった当時、同誌の刊行は画期的だった。なかでも注目されるのは、横尾による「ピカビアとの交霊日記」である。宇宙人(天使)を介した、横尾と物故芸術家たちの霊との交信記録で、アンリ・ルソー、ピカビア、マルセル・デュシャン、マン・レイが横尾の問い合わせに答える形式である。

驚くべきことは、この交信記録が、30年以上後に横尾が発表する長編小説『原郷の森』(2019~2021)と、構造的に極めて近似していることだ。(け げんきょうのもり【原郷の森】参照) 異空間「原郷の森」で死者が語らうという設定の背景には、それに先立つ霊界とのコンタクトの記録が、既に何十年にもわたって存在していた可能性を感じさせる。

**Seneca n.**

《SENECA》(2018)は「謎の女」シリーズの1点(な なぞのおんな【謎の女】参照)。フランシス・ピカビアの《ふたつのヌード》(1940~1941頃)を下敷きにしており、画面下部に横たわる女性像は、ほぼピカビア作品の模写である。ピカビアは、フランスの複数の大衆雑誌に掲載された写真を参照し、画面上に引用・合成しているが、そうした方法論は横尾の制作方法とも近似している。

「謎の女」シリーズは、様々なオブジェが唐突に女性の目を覆い隠し、その表情を見えにくくすることで、謎めいた印象を与えるのが特徴である。本作では点滴筒が、座る女性のちょうど目の部分に重なっている。点滴は「病院マニア」である横尾の象徴である。



またこの作品において、点滴はアーティストに栄養=インスピレーションをもたらす装置でもある。複雑に絡まりあったチューブにはラテン語で「non est magnum ingenium sine mixtura dementiae」と書かれている。これは古代ローマ時代のストア派の学者、ルキウス・アンナエウス・セネカ(BC1頃~65)の格言に基づいており、「狂気が混じっていなければ偉大な天才は存在しない」という意味である。セネカは若き第5代ローマ皇帝ネロの家庭教師を務めた。やがて暴君として恐れられたネロは、政敵のみならず弟や母、妻までも死に追いやり、ついには謀反の疑いをかけられた師のセネカに自殺を命じるに至った。

関連イベント



吉田省念ライブ「爆発的凝縮」

ルーツミュージックからアバンギャルドまで多岐に吸収し、幅広い音楽を生み出す吉田省念によるライブ

日 時:3月21日(土)15:30—

会 場:当館オープンスタジオ

出 演:吉田省念(よしだ・しうねん Vo., Guitar)

参加費:無料(予約不要、先着順)

定 員:80席

キュレーターズ・トーク

担当学芸員が本展の見どころを分かりやすく解説します

日 時:2月8日(日)、3月8日(日)、4月18日(土) いずれも14:00—14:45

会 場:当館オープンスタジオ

講 師:当館学芸員

参加費:無料

※イベントの詳細や、その他のイベント情報については当館ウェブサイトをご覧ください

相互割引

- ・兵庫県立美術館(特別展またはコレクション展)のチケット半券→当館企画展が団体割引料金に
 - ・当館企画展のチケット半券→兵庫県立美術館(特別展またはコレクション展)が団体割引料金に
- ※会期中のチケット半券に限り有効

基本情報

大横尾辞苑 これであなたもヨコオ博士!?

The Grand Yokoopedia: Why Not Be a Yokoo Expert!?

2026年1月31日(土)—5月6日(水・振休)

開館時間 10:00—18:00 ※入場は17:30まで

休館日 月曜日 ただし2月23日(月・祝)、5月4日(月・祝)は開館、2月24日(火)は休館

主 催 横尾忠則現代美術館([公財]兵庫県芸術文化協会)、神戸新聞社

後 援 サンテレビジョン、ラジオ関西

協 力 ホテルオークラ 神戸

観覧料 一般800(600)円、大学生600(450)円、70歳以上400(300)円、高校生以下無料

- ・()内は20名以上の団体割引料金
- ・障がいのある方は各観覧料金(ただし70歳以上は一般料金)の75%割引、その介護の方(1名)は無料
- ・割引を受けられる方は、証明できるものをご持参のうえ、会期中美術館窓口で入場券をお買い求めください
(障がいのある方は、障がい者手帳アプリ「ミライロID」もご利用いただけます)

出品点数 約130点

※状況に応じて予定が変更になる場合があります。最新情報は当館ウェブサイトをご覧ください

お問合せ

横尾忠則現代美術館

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30

tel. 078-855-5607(総合案内) fax. 078-806-3888

学芸担当:山本淳夫<yamamoto_atsuo@ytmoca.jp>

広報担当:早水千尋<hayamizu_chihiro@ytmoca.jp>

画像データは当館ホームページ(<https://ytmoca.jp>)のプレス専用ページからお申込みいただけます
ホームページに掲載されていない画像は、上記連絡先までご請求ください

Yokoo Tadanori Museum of
Contemporary Art

Y+T MOCA

横尾忠則現代美術館

Yokoo Tadanori Museum of
Contemporary Art

Y+T MOCA

横尾忠則現代美術館